

2人の異才-弼楽高校に潜む表現者について-Vol.2

星野林檎×榎本康介

『empty EP.』を、2人の作詞家が掘り下げる。

星野林檎

日本のソングライター、ドラマー。私立弼楽高校2年生で、軽音部。ロックバンド「袖口とスパイス」のリーダー。1年の頃からメンバーと宅録で音源製作をしていた時のプロジェクトをバンドに仕立て、作詞作曲と共にドラムを担当することになった。救われない物事を独自に解釈した世界観と、刹那的なアンサンブルが特徴。今回の『empty EP.』では全編を通して作詞作曲をしている。

榎本康介

日本の作詞家、ベーシスト。私立弼楽高校3年生で、同じく軽音部。ロックバンド「San Han KikanZ」のメンバーで、バンドの作詞とベースを務めている。等身大の高校生がもたらす背伸びしがちな視点と甘酸っぱさを、飾らない言い回しで表現した世界観が多い一方で、最新作『少年たちの挽歌』では殺伐とした散文詩的な歌詞も見受けられる。袖口とスパイスとは、リリース以前から定例ライブなどで共演を繰り返している。

あれもこれも、って思いながらだけどサクサク進まない.....！って悩んじゃう。

——本日はよろしくお願いします。

星野：よろしくお願いします。

榎本：よろしくお願いします.....。

——1st EP『empty』リリースおめでとうございます。今作はどういう思いを持って作品に取り組まれたんですか？ テーマやコンセプトがあった上で、制作に入ったんですか？

星野：記録をしてる感覚でやってました。今の段階でどういう方向性とか、あんまり深く考えてもしようがない気がするんです〜。なので、現時点で良い寄りの曲を3つ、録り下ろしたって感じですね。

榎本：記録.....僕も、それは少し似てるような気がします。毎日の日記をつけてるような、そんな気分.....。

星野：日記って、ちょっと分かるかも。書いてることがお互い違うから第三者からの共感は得られないかもなんですけど〜.....

榎本：分かるから大丈夫だよ。そこに加えて星野ちゃんは曲もやってるんだからすごいなあって思う.....。

星野：その分、時間が掛かっちゃうのは永遠の課題ですねえ〜。あれもこれも、って思いながらだけどサク

サク進まない……！って悩んじゃう。でも、今回の3曲は出来合いってよりはちゃんと時間を掛けてよかったなって～……と思いますねえ。

——出来上がって手応えはいかがですか？

星野：時間を掛けてよかった～って言ったけど、これだけ絞って1つ1つにこだわっても、なんか違うんですよね～。まだこれでいい気がしないっていうのを、ずっと感じてます。

榎本：どうしてもギリギリまで聴いて、「やっぱこうする、したい」って思うもの……なのかな。

星野：思いますよ～。先輩も良く録り直しさせられてないですか？

榎本：されてる……躓いてミスってやり直す、みたいなのではなくて、RECが終わって何日か後に「ここやっぱり～」って……榎也くん(*)に。

*渡瀬慎也。San Han KikanZのギターと作曲を担当している。

星野：私も、よくそんな感じで志島先輩にお願いしちゃうことがよくあって、申し訳ないなって思う時もたまにあるんですよね……。

榎本：いい物を作る為には、そういうのも重要だから……されてる方としては、やだなってことはないの……。

星野：ならいいのかなあ。先輩は歌詞を書く時にそういう時がありそう～……そんなでもないです？

榎本：僕に関してはそんなことなく……曲に対して湧いたインスピレーションを、1曲に対して毎回書き切る事が多いから……後で変えるみたいなことは、あんまりって感じ。

星野：あんまりって感じなんですねえ。

——“もっとこうしたら良くなるな”という思いはどこかありましたか？

星野：あります。あるけど～……なんか、上手く言葉にできないから、それは今後の経験に任せることにしようかなって。

榎本：それで分かったり、良くなることもあるかもしれない……もんね。

星野：ですね～。

何もないっていいでしょ、いいですよ。

——今回は校内でのレコーディングだったとの事です、いかがでしたか？

星野：録り音が思ったより綺麗に録れたのはびっくりしました。結局、DAWでミックスとマスタリングをしちゃうけど、それ以前の音がちゃんと録れてるかはすごい大事な。うれし～って感じですね。

榎本：嬉しいんだ。

星野：嬉しいってより、うれし～って感じ。

榎本：うれし～って感じなんだね。

——今作を作るにあたり、苦労した点等ありましたら教えて下さい。

星野：録音って緊張しちゃうけど、でも演奏は普段通りにやってたんで苦労はしなかったです。けど、ボーカルが喉弱くて、それで歌入れはギリギリまで時間使っちゃった部分があります。でもそれは仕方ないかな～。仕方なくないのかな。

榎本：仕方ない.....んじゃないかな。最良のものを録るって言うのは当たり前だけど、喉って凄くデリケートだから.....むしろギリギリまで使ってもいいくらいだと思ってる。

星野：リハーサルやライブは、その"瞬間"が切り取られるから割り切ってはいるんですけどねえ.....。

榎本：瞬間、よりも常に聴かれるってことを考えるとむしろセーブをするのもありなのかもね。ライブよりも余力が残るように意識をするっていう.....。

星野：なるほど～。可不ちゃん(*)にできるかなあ、それ。

榎本：できると思うよ.....僕らもやってるから。

*可不。袖口とスパイスのベースボーカル。今作で彼女の歌声が聴ける。

——初のリリースがEPということもあり、今回の3曲は非常に厳選されたものだと思っています。袖口とスパイスは、現時点で何曲持っていますか？

星野：没にしたのを含めたらフルで1枚作れるけど、今やれるのは今回の3つと、収録を見送った2曲で5曲ですね。ライブで色々やってたけど、どれもピンと来なくて、没にしちゃった。

榎本：何かの機会に焼き直しするとか、そういうのはある.....？

星野：うーん.....以前、バンドやる前に取り入れてたシューゲイザー的な要素は今後にも活かしたい気持ちは

ある、くらいですね～。曲数も増やしたいなあ、これからもっと長い時間任されるかもしれないし。

榎本：曲数がなければ音源もできないからね.....。

——今作のタイトル名である『empty』は翻訳すると『空っぽ』という意味ですが、どういう意味でそのタイトルにされたのですか？

星野：何もないから、逃れられることができるわけで。何もないから何かになれるわけで。何かになるうとすると、その過程で空っぽになるんですよ、どこかで。何もないっていいでしょ、いいですよ。

榎本：いいんだ。

星野：いいんですよ。埋まってみます？

榎本：やあー.....気持ちだけ、気持ちだけ受け取っとくね。

——ところで、おおよそ穏やかではない歌詞の内容ですが、どんな時にこういう言葉が思い浮かぶのですか？

星野：ん～、私の口から言っちゃうのはナンセンスになりそうで怖いですね～。

榎本：結構、星野ちゃんの曲は.....繊細でデリケートだからこそ、むしろそこは不透明なのが、より期待できる.....ような、感じはある、よね。

星野：けど、質問は質問だから～.....ちょっとだけ言っちゃうとだけ。

榎本：ちょっとだけ言っちゃうんだ。

星野：ふとした瞬間、って皆さんもあると思います。

榎本：ある.....。

星野：それだけです。本当はもっと奥深くに理路整然とした理由があるけど。なーいしょ。

榎本：本当にちょっとだけだった.....。

いわゆる、"フシギ"って感じがする。

——袖口とスパイスは、目まぐるしく展開するサウンドに重なる、透明感のある可不さんの歌声が魅力のひとつだと思いますが、今作の作曲面、アレンジ面で特にこだわった点等がありましたか？

星野：やっぱりギター、ですねえ。フレーズも考えたのを弾いてもらってるって感じ。

榎本：凄く、特徴的なアルペジオっていうか.....変なギターのフレーズだね。でも、聴いてみると音の並び方は、変じゃない.....っていうような。

星野：普通に弾いてもらうんじゃつまんないフレーズになっちゃうから、あえてそうしてもらってるっていうか.....先輩のセンスな部分があるけど、それをどう活かすかっていうのを特に意識した部分はありますねえ。

榎本：可不ちゃんの歌声って、星野ちゃんはどう思ってるの.....？

星野：ん〜、と。薄くて細いけど、溶けないし、ちぎれない。いわゆる、"フシギ"って感じがする。できない声ができるような。その声に何を載せるかによっても、左右される部分ってあると思ってます〜。

——聴いている人がハッとするサウンドというのは常に考えていますか？ 特に『相剋』のイントロは意表を突くようなものでしたが。

星野：最初は歌い出しだったんですけど、リハの時の併せで、ドラムを褒められて。それで、いっその事イントロをドラムだけにしてみるのもありな気がして、そうなっただけですね〜.....。

榎本：中々、尖った始まり方っていうか.....凄まじさと気迫を感じる。あそこから8弦のブリッジミュートとか入れても始まる気がするし、ベースのルート弾きでも.....の中に、空間を消して.....改めて歌入りっていう切り替え方が、僕は.....その、「やられた」って思いました。

星野：やられちゃいました？

榎本：やられちゃった.....。

——『揺籃』の中にある、『手足を失くした嬰兒』という歌い出しにはどんな意図が？

星野：この曲の答えっていうか、結論っていうか.....考えが狭まっちゃう気がして、今ここで言うのはとても〜.....って感じかも。

榎本：僕はこうだと思った.....みたいな余地の楽しさがありそうだから、無理に答える必要は.....ないと思う。

星野：ですよねえ。なので内緒で一す。

——この曲をリード曲にした理由は、やはりボカコレに先行していたこともあったからですか？

星野：先行した.....もあるのかなあ。だけど、この曲は過去作った中でも、自分で聴くから.....自分でも聴けるようなのっていうのはやっぱり、自信があることの裏付けだから、それで積極的にやっていこう～、みたいな。そんな感じです～。

榎本：聴かせてもらってる立場から言うと.....何て言えばいいのかな.....変な話、誰かにおすすめするなら僕もこの3曲の中で『揺籃』を選ぶと思う。そんな感じ。

星野：やっぱ先輩もそんな感じなんですねえ。

榎本：正直、ジャンルとしては.....かなり人を選ぶような気はする。けど.....明確な分かりやすさと役割がそれぞれにあって、成り立ってる.....みたいな、バランスの良さがリード曲らしい.....って、思う。

星野：ありがとうございます～す。

——このインタビューを見てくださる方に向けて、1曲ずつ簡単な曲の紹介をお願いします。

相剋／今回のリリースツアーの名前「塹壕」はこの曲の歌詞がモチーフになってま～す。あと速い曲だから、くるくる走ると面白そう～。

感光／みんな面白いことやってる曲です～。テーマに対してコード進行を載せるってやり方は、アメリカン・フットボールを参考にしたかも。

揺籃／この体制になって初めての曲.....ボカコレの時から聴いてる人もいるのかなあ。ジャケットのスプーンの持ち方と、この曲の歌詞に注目してみると、面白くなりそうだな～。

——次回作ではどういったものを作るという予定はございますか？また、今後の活動について意気込みをお願いします。

星野：今回ののはあくまでも名刺のような役割として作ったから、もっと作品的な.....コンセプトを明確に持ったアルバムを作りたいな。それこそ、先輩が先月に出したような。

榎本：僕らのアレは劇伴のような立ち位置だから.....星野さんは架空の物語とか作るの好き？

星野：好きかもです～。その一歩手前の立ち位置として、曲を作ってる部分もあるから.....。

榎本：1曲ごとのテーマというか、世界を繋げてみたら、面白そう.....。

星野：なるほど～.....参考程度に考えますねえ。

——その他書いておきたい事がありましたらお願いします。

星野：志島先輩とそっくりなウエイトレスさんを休みの日に商店街の喫茶店で見たことがあります～。先輩ってどの辺に住んでましたっけ。

榎本：派手な女の子が好きなのは事実ですけど……でも、だからといって派手ならいいって訳じゃ……ないです。

ここまで読んで下さりありがとうございました！次回もお楽しみに！

企画・インタビュー：灘町朋美 (私立弐楽高校2年放送部)